第69回（2025年度）　北海道開発技術研究発表会論文

街歩きモニターの意識・行動と街区特性の関係に関する考察

国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所 地域景観チーム　○大部　裕次
上田　真代
岩田　圭佑

地方部小都市等において、人が集い交流を生むような「地域を豊かにする歩行者中心の道路等の空間」の構築が期待される。本研究では、この実現に向けた計画・設計手法の検討に必要な基礎データ収集を目的に、モニターを集い実際に街歩きをしてもらう「街歩きモニター調査」を実施し、モニターの行動の記録とアンケート調査の結果から、歩行者の意識・行動と街区特性の関係性について考察した。

キーワード：ウォーカブル、街歩き、歩行空間、モニター調査

1. はじめに

都市部では道路空間の活用やそれによるにぎわい創出などが試みられ、道路ビジョン「2040年、道路の景色が変わる[1]」においても「公園のような道路に人が溢れる」などの将来像が示されたが、人口減少にある地方小都市等ではこれまでの手法での市街地の魅力向上は困難である。また「北海道総合開発計画（8期計画）[2]」でも「地域としての生き残り」「活力ある北海道の創生」が言及され、地方の暮らしの魅力向上は、喫緊の課題である。

全国的には、「道路法等の一部を改正する法律案（R2.2）[3]」において、「地域を豊かにする歩行者中心の道路空間の構築」などが位置づけられた。この実現に向け「賑わいの創出」「滞留を促す広場づくり」などに関する研究や取組みは以前より行われてきたが、これらは大・中都市の中心市街地など、日常的に歩行者が往来するエリアを対象としており、そのような現状にない地方小都市には既往の知見や技術の適用は困難である。特に、「歩く文化」が根付いていない北海道などの地方小都市（**写真-1**に例示）では異なる手法が必要と考える。

そこで、本研究においては、外部からの自動車アクセスを前提として、中心市街地に人を誘導し、それらの人に回遊・滞留を促すような道路空間および沿道空間のあり方について明らかにし、地方部の小都市等にも適用可能な、「地域を豊かにする歩行者中心の道路等の空間」に関する計画・設計手法の確立を目的とした。

本稿においては、この検討に必要な基礎データ収集を目的に、モニターを集い実際に街歩きをしてもらう「街歩きモニター調査」を実施し、行動の記録とアンケート調査の結果から、歩行者の意識・行動と街区特性の関係性について考察した。

写真-1　商店街等にも自動車で来訪し、すぐ帰ってしまう

2. 街歩きモニター調査の方法

(1) 街歩きモニター調査の概要

長野県小布施町において街歩きモニター調査を実施した。調査の概要を**表-1**に示す。

調査は、一般モニター10名を集い、「街歩き」として小布施の街なかを2時間自由に歩いて巡ってもらい、道中の経路やその選択のきっかけ、道中で気になった場面や出来事について、行動とその理由を記録してもらった。

記録については、スマートフォンを貸与し、GPSアプリで移動経路を自動取得した。また、ルート選択のきっかけや街歩き中に気になったことについて、具体には「モノ：形のある物や空間、または場面」と「コト：視覚だけでない人との交流や出来事・体験、または場面」について、なぜきっかけになったか、なぜ気になったかを、カメラアプリで映像と音声で記録してもらった。

また、街歩き終了後にはアンケートを実施し、街歩き中に特に印象に残った空間・場所、人との交流、地域の情報に関する印象と、街歩き及びこれを通じた街への興味などについて回答してもらった。

OOBU Yuji、UEDA Masayo、IWATA Keisuke

⑵ 調査対象地の概要（長野県小布施町）

調査対象地は、長野県小布施町である。県内で最も面積が小さく、人口は10,850人（2026.1.1現在）の地方小都市であるが、特産品の栗菓子や、ゆかりのある葛飾北斎をはじめとする歴史的遺産、またオープンガーデンなどを活かした街づくりを行っており、「栗と北斎と花の町」と言われる人気の観光地となっている。

図-1に小布施町の地図を示す。「栗の木テラス」や「小布施堂」など栗の菓子を販売する商店や、「北斎館」などの博物館等が集まるエリアが観光の中心であり、神社やミュージアムなど歴史文化施設も広く分布している。

街のいわゆる玄関口は、鉄道アクセスの「小布施駅」のほか、「町営森の駐車場」「町営松村駐車場」などの自動車アクセスの拠点があり、それぞれ中心部までの距離が500m程度と徒歩でのアクセスが良好である。また、民間駐車場も多く配置されている。

駐車場と施設を結ぶ歩行動線は、街の南北を貫く国道403号や東西の街路（大日通り）などの大通りの歩道のほか、歩道の無い細街路となるが、歩行者専用の通路が道路・公有地だけでなく、民有地も活用して小径（こみち）として整備されていることが特徴的である。

3. 街歩きモニター調査の結果

街歩き調査の結果について、移動行動から把握した街区の構造、行動記録から把握したモニターの意識・行動要因、及びアンケートの結果について以下に示す。

⑴ モニターの行動から把握した街区構造

今回の調査では、自動車アクセスを前提に、町営森の

表-1　街歩きモニター調査の概要

実施期間	令和7年6月14日（土）13:30～15:30
実施場所	長野県小布施町中心部
調査対象	街歩きモニター参加者　10名 （20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳以上の男女各1名を目標）
調査方法	2時間の街歩きをしていただき、道中の経路やその選択、現地の景観や歩行空間について、スマートフォンを利用したGPS、動画（写真、音声データ）として記録する。 街歩き終了後には、アンケートを行う。
データ取得	Ⅰ移動経路の記録（GPSアプリでの自動取得） ・移動経路、移動距離、移動速度　等
	Ⅱ行動の記録（カメラアプリを使って記録） <記録するタイミング> • スタート直後・ルート選択のきっかけ、歩いている道中に気になった「モノ」や「コト」 <記録すること> • なぜきっかけになったか、なぜ気になったかについて、その場面の映像を撮り、思ったこと・感じたことなどの理由を音声で記録する
	Ⅲ街歩き終了後アンケート • 属性、街歩きの趣向 • スタート地点（駐車場）の評価 • 印象的だった場所・場面や出来事の中で、①空間・場所、②人との交流、③地域の情報について、複数挙げ、それぞれの評価 • 街歩きの印象、また街歩きを通じた街の印象

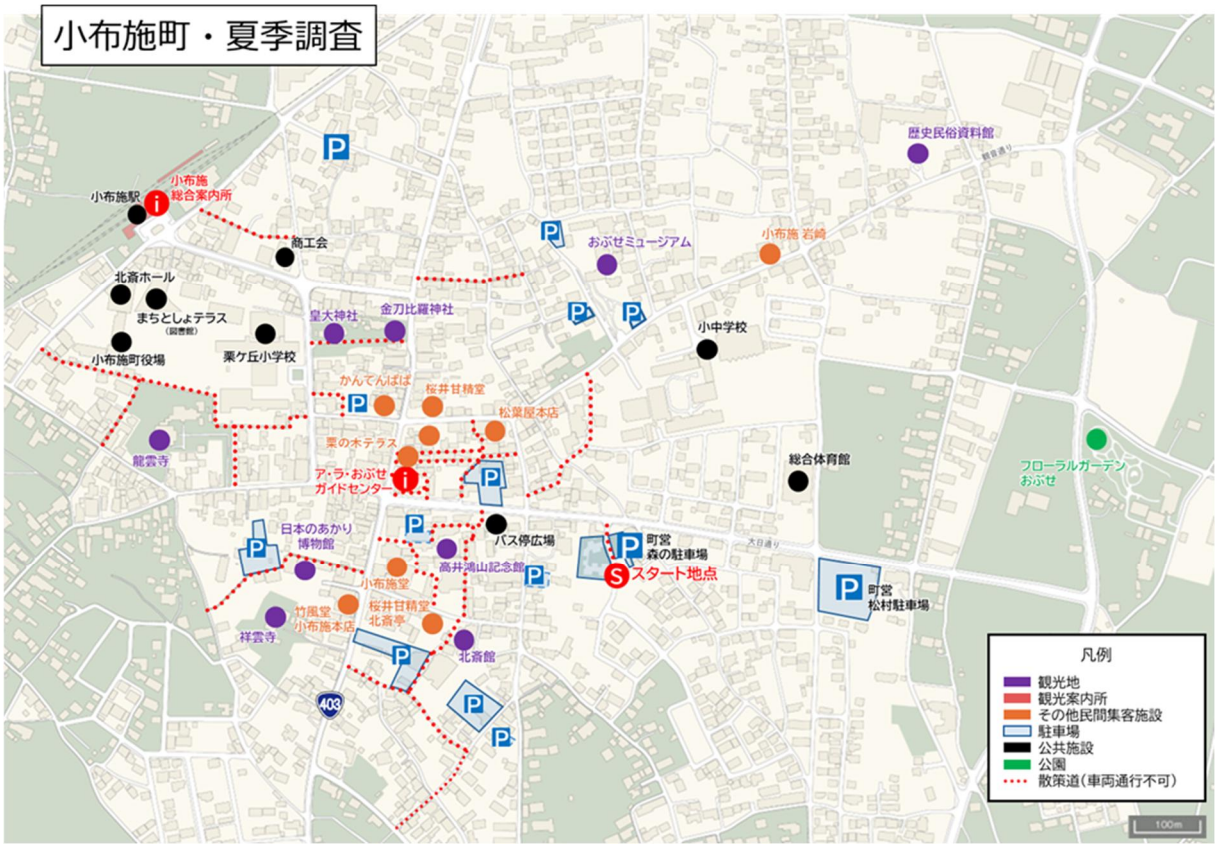

図-1　小布施町中心部の集客施設等と駐車場の配置

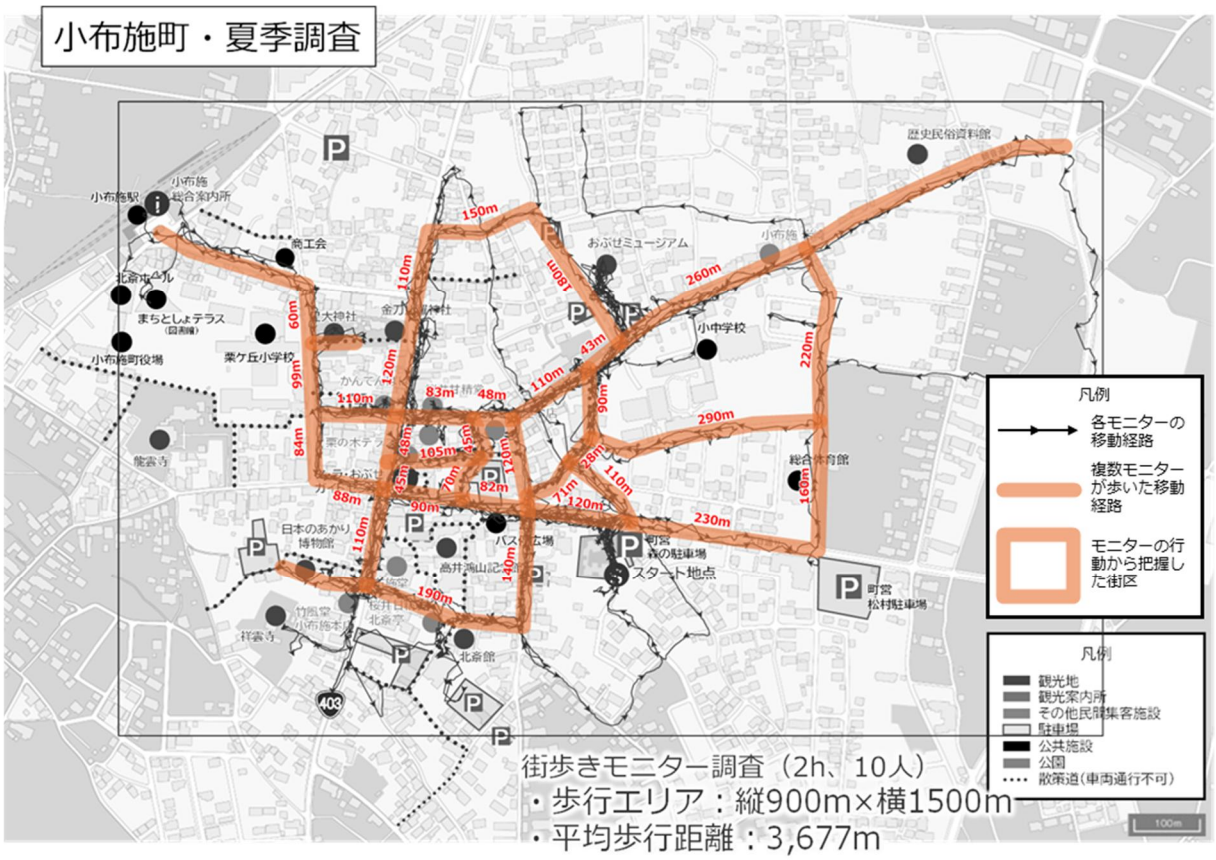

図-2　街歩きモニターの移動経路と、これを基にした街区の抽出

駐車場をスタート地点として、自由に街なかを歩いて巡ってもらい、2時間後にスタート地点に戻ってきてもらうこととした。

モニター10名分の移動経路を**図-2**に実線と矢印で示す。多くのモニターは中心部を回遊するが、それだけでなく小布施駅や歴史民俗資料館など広範囲に行動するモニターもおり、歩行エリアとしては南北約900m×東西約1,500mの範囲で、平均歩行距離は約3.7kmであった。この行動要因については次節にて詳述するが、魅力のある商店やレトロやモダンと表現される沿道建物の街並み、また綺麗に整備された庭園・ガーデンなどを眺めながら、ゆっくり散策していたと思われる。

また、複数のモニターが通った経路を抽出し模式的に現した線を、**図-2**に赤太線で示す。交差する点をノード、それを結ぶ線をパスとすると、パスの長さは28m～290m（平均約115m）であり、歩行者専用通路が有効に活用された密なネットワークが形成されていることが把握できた。また、ノードとパスで結ばれ囲まれた区画（街区）が10箇所形成されており、これを便宜的に四角形の街区とすると、1辺が51m～226m（平均約125m）のコンパクトな街区であり、これらが隣接し密に連携していることが把握できた。これについても、次節以降で詳述するが、コンパクトで密な街区構造により、モニターの有機的な移動行動を支援していたと思われる。

⑵ モニターの行動を促した要因

モニターの行動記録から、歩きだしやルート選択の行動に繋がる「モノ」「コト」の要因を抽出し、以下の何点かの知見を得た。以下詳述する。

a) 小径の整備と細やかな案内

前述したとおり、歩行者専用通路となる「小径」の整備が充実しており、歩行者の回遊行動が生まれていることを把握した。特に、**図-3**に示すように街区の外周道路だけでなく、街区の中を通行することができる小径が整備された街区で顕著であった。

この街区では、図中の**写真①②**及び**⑧**のように、駐車場から街の間を連結する広場や休憩スペースが官民一体で開放的に整備されており、視界が開けた空間であることから、駐車場から歩き出す歩行者が次の行動の目的を見つけられやすくなっていた。そのため、当該街区に移動するだけでなく、移動の選択肢の幅が広がり、隣接する街区への結節点ともなっていた。また、**写真③④⑤**のように小径の入口は、店舗の横などで発見されやすく、かつ入口だと分かりやすい案内看板や、「通り抜けできます」などの誘導看板が充実しており、歩行行動への意識的なハードルを下げていた。更に、小径の道中では**写真⑥⑦**のように、地域の建物等を間近で見ることができたり、お菓子工場の生産現場を眺めることができたりと、地域の生業（なりわい）を見る機会が得られたことで、地域への理解が深まっていたと思われる。

図-3　モニターの行動要因：小径の整備と細やかな案内

b）官民連携による案内標示の充実

多くの案内標示が設置されており、歩行者のスムーズな移動を支援していた。図-4は、一人のモニターが2時間の街歩き中に見かけた様々なタイプの案内標示であり、非常に数が多く充実していることが分かる。

歩行行動にあたっては、案内標示により目的地の方向を知ること、若しくは歩く目的自体を得ること、及び先の見えない小径への不安の解消など、歩行者が歩き出すきっかけとなっていた。また、全体的に茶色や黒を基調とした落ち着いた色使いで、歩行者が見やすい低い位置に設置されている。形状は、画一的な道路標識ではなく、木材を使った標柱や、壁に直接貼り付ける案内地図、「通り抜けできます」と書かれた板を立てかけておくだけのものなどもある。

公共だけでなく地域の人々が、個々の宣伝だけでなく「街なかの道案内」や「小布施らしさ」を重視して案内標示を充実させていることが伺えた。これを受けたモニターは、案内標示の色や形、個々の工夫と一体感から「小布施らしさ」を感じ、数多く標示に出会うことで「案内の多さは親切」という印象を受け、これらが街自体の印象向上にも繋がっていたと思われる。

c）歩行者優先が感じられる道路の格付け

図-5に示すように、駐車場から周辺への動線、目的地への経路や店舗が並ぶ通りなど、歩行動線にあたる道路では、沿道の建物などと一体感のあるブロック舗装などで整備され、景色を楽しみながら安心して歩行できる環境が形成されている。このような歩行空間があることで、モニターの経路選択も、通常のアスファルトの道路から変化を感じる当該通りに誘導されている傾向があった。

小径については、歩行者専用通路として確保されており、前述したように誘導する工夫から多くの観光客などが行き交っている。このような人の流れを見かけることでも、歩行行動に繋がることが今回調査で確認できた。

また、店舗前の広場や、一般住宅の庭先でも、花や緑が豊かな居心地のよい休憩スペースが公共の歩道と一体的に整備されており、歩行者へのサービスが充実している。今回の2時間調査では時間が短いためモニターの休憩は少なかったが、かわいいベンチやガーデンと一体となった腰掛けスペースなどが良く目にとまっていた。

全体的に、歩行者優先が感じられる歩行空間の形成は、歩行者を誘導し、かつ沿道の建物や地域の生業、花や自然に触れる機会が多くなり、街の印象向上にも繋がっていると思われる。

図-4　一人のモニターが２時間の街歩き中に見かけた案内表示

▲歩行者優先と分かるブロック舗装　▲通り抜けできる小径やオープンガーデン　▲住民レベルでも用意される休憩場所

図-5　歩行者優先が感じられる道路の格付け

⑶ 街歩きモニターのアンケート結果

街歩き調査終了後、モニターにアンケートを依頼した。

街歩きの中で、特に印象に残った点について、①場所・空間、②人との交流、③地域の情報を複数挙げてもらい、その理由を訪ねた。また、街歩き調査を通じた街の印象について訪ねた。以下回答の要点を記載する。

a) 印象的だったモノやコト

- 建物、舗装、看板など、街並みとの調和に配慮した茶系の色使いやしつらえが全体的にまとまっており、レトロやモダンのように表現される小布施の景観イメージが形成された。
- 栗をテーマにした飲食店やその他施設が多く、栗の町としての地域性を感じた。
- ミュージアムや博物館、神社など、地域の歴史を感じられた。
- 庭園（オープンガーデンやミュージアムの外構など）が魅力的であり、花や自然が豊富との印象が形成された。

b) 街の印象

- 歩いた体感時間が「短かく感じた」が8割。小布施の街歩きが楽しい行動だったことと捉えられる。
- 地域の個性を「とても感じた」が6割。栗の町という印象、蔵や瓦などのレトロ・モダンな景観、花や自然に多く触れたことが関係していると考えられた。
- 街への興味が「とても興味がわいた」が7割。また街歩きが「とても楽しかった」が8割。前述の質問も含め、街歩きが良い体験であれば、街への印象が向上すると考えられた。

4. 歩行者の意識・行動と街区特性に関する考察

今回の街歩きモニター調査から得られた知見から、歩行者の意識・行動を促す街区特性について、構造的な成り立ちやその効果と、これを構築する際のポイントについて考察した。以下、要点を示す。

a）目的地に繋がる複数の歩行動線

街歩きモニターの行動・移動経路から、道路及び通路のなかで実際に多く使われる歩行動線を抽出した。

歩行動線は、道路や公有地だけでなく民地も活用して密に確保することと共に、結節点や集客の拠点を的確に繋ぐことが重要であると考えられた。また、歩行動線の空間づくりについては、沿道の建物や店舗等と調和し歩行者が優先と感じられる路面や空間、居心地が良く移動の結節点となる広場や休憩スペースの整備などが重要であると考えられた。

b）動線に促す情報発信の重要性

前述のような歩行動線の密な確保や空間的な分かりやすさに加え、案内・誘導する情報発信も重要となる。

小布施では、特に歩行者のための案内標示が充実しており、小径など初見では入りづらい通路でも安心して通行できるように歩行者を支援している。また、通路の途中でも「通り抜けできる」という案内を頼りに、実際に通り抜けられることが分かると、他の小径等の通路への移動行動がしやすくなると思われた。更に、目的地へのスムーズな移動支援だけでなく、案内により新たな目的の発見に繋がることも、更なる歩行行動の誘発に繋がると考えられた。

c）地域の参画によるハード・ソフトの整備

空間整備や情報発信については、公有地だけでなく民有地も活用して整備・取り組みをすることが重要であると考えられた。

小布施では、オープンガーデンの取り組みが広がっており、一般の住宅の敷地でも歩行空間として開放するだけでなく、花壇の整備やベンチの設置など歩行者へのサービス提供にまで取り組まれていた。また案内標示などの情報発信においても、店舗などの個々の宣伝だけでなく、道案内や街全体の広報に繋がるように取り組まれていた。これらの取り組みは歩行者に好意的に受け止められ、街の個性を感じることやイメージの向上にも繋がると考えられた。

5. まとめと今後の展開

本稿においては、地方部の小都市等にも適用可能な、「地域を豊かにする歩行者中心の道路等の空間」に関する計画・設計手法の確立を目指し、この検討に必要な基礎データ収集を目的に、「街歩きモニター調査」を実施し、行動の記録とアンケート調査を行った。この結果から、歩行者の意識・行動を促す街区特性について考察し、目的地を的確に繋ぐ密な歩行動線の重要性、歩行者を誘導する情報発信の重要性、また、ハードソフト両面における地域参画の重要性について基礎的な知見を得た。

しかしながら、必要な街区特性に関する定量的な検討や、地域参画に関する意識醸成や体制づくりなど、課題を抱える他の地方小都市に適用していくための知見が不足していることは課題である。そのため、今後は国内外における同様な調査の実施による街区特性の定量的な比較検討、また関係者ヒアリングなどを行い、計画・設計手法の確立を目指したい。

参考文献

1) 国土交通省：2040年、道路の景色が変わる～人々の幸せにつながる道路～、2020.6
2) 国土交通省：北海道総合開発計画、2016.3
3) 国土交通省：道路法等の一部を改正する法律案、2020.4